

『老子麁齋口義』の明暦三年刊本と

延宝二年跋本との比較

王

廸

はじめに

江戸初期の『老子麁齋口義』の流行は、林羅山によって取り上げられたことが契機となっている。羅山の老莊関係書物七部の中で『老子麁齋口義』に関するものが六部を占めている。⁽¹⁾ それらはいずれも同書名で、「林信勝（羅山）点」「林羅山校」「林羅山撰」又は「林羅山点並首書」⁽²⁾ などとしている。刊記によれば、「正保四年林甚右衛門新刊」及びその異なる書肆の重刊本「正保五年書林豊興堂重行刊本」のものもあれば、「明暦三年京都上村次郎右衛門刊」などのものもある。これらの刊本のうち、東京大学総合図書館所蔵の明暦三年（一六五七）刊『老子麁齋口義』の頭注にある「解者堅按」や「堅按」が即ち『江戸時代書林出版書籍目録集成』に著録されている「尚堅」と同一人物であることは、すでに別に指摘した。⁽³⁾ 同書籍目録に最初に著録された「尚堅」の書物は、延宝三年（一六七五）の出版物「老子經増補首書尚堅（作）」⁽⁴⁾ であるが、現在、延宝三年刊『老子經増補首書尚堅（作）』の存在は確認できない。しかし、『老子麁齋口義』の明暦三年刊本（以下は明暦本と称す）と延宝二年（一六七四）徳倉昌堅跋本（以下は延宝跋本と称す）は数多く存在する。⁽⁵⁾ 両本を検索して見れば、後にも述べているように、明

曆本にある「堅」が即ち延宝跋本にある「昌堅」と同一人物ということが分かる。但し、「徳倉昌堅」を「徳倉昌賢」とし^⑥、「明曆本」を「林羅山点 徳倉昌堅首書」とし、「延宝跋本」を「明曆本」の翻刻（覆刻）本とする説もある^⑦。実際調べて見れば、「昌賢」は単に「昌堅」の誤りであることが分かる。だが、「延宝跋本」は「明曆本」のどこまで翻刻したかについて、両書物全体に互って確認する必要がある。又、明曆本の全てが徳倉昌堅の首書だということにも些かの疑念を持たせる。そこで、家蔵の明曆本及び延宝跋本を取上げ（末尾の書影参照）、今まで調査した結果をベースとして、両本の特徴や異同、及びその経緯や注解者の補注姿勢について更に明確にすることが本論文の目的である。

一、書誌から見た両本の異同

明曆本の本文は、先行する正保四年（一六四七）刊本の版式（半葉・行格の文字数）と同じであるから、正保四年刊本に基づいて刊行したものと分かる。だが、前者は後者の頭注（首書）を所々踏まえながら、大幅に増補し、又、書体が異なるから、全く別刻本であることが分かる^⑧。延宝跋本は、その十七年前に刊行された明曆本と比べれば、ごく稀に文字の画数の増減が見られる^⑨。その本文は版式と書体が明曆本と全く同じであり、明曆本の覆刻と言える。しかし、両者には頭注など多くの点で相違が見られるから、延宝跋本は決して全てが明曆本の覆刻ではない。まず、書誌の異同について考察して見たい。

表一 「明暦本と延宝跋本の書誌比較表」

刊記	奥書	小口書	丁数(丁付)	魚尾	版心名	行格			綴じ方	版式・匡郭寸法など	冊数	寸法	内題	籤題	表紙	書誌	刊本
						本文	頭注	巻頭									
明暦三年丁酉年孟夏吉辰 二條通玉屋町上村次郎右衛門新刊	羅山子道春考焉	老子經 天/地	卷上一く五十；卷下一く五十一	単黒魚尾	老子經卷上/下(十一く十三葉は「上巻」となる)	半葉八行十八字(口義注文字稍小低一格)	半葉十八行・十字(子柁欄外書脳寄り、四行・三十六字)小字、本文と同書体。	上巻巻頭の注解、半葉二十二行三十六字、首頁右上・下及び下巻首頁上・中・下蔵書印あり。	四針目	親子柁・四周単辺無界・縦二十五糎×横十七・五糎(子柁縦十八糎×横十四糎)。 訓点・返り点あり。	二冊	縦二十七糎・横十九糎 美濃本	老子虞齊 ^{ママ} 口義	老子 上/下	縹色	明暦三年刊本(一六五七)	明暦本
延寶二年甲寅秋七月徳倉昌堅跋あり。 二條通玉屋町上村次郎右衛門重刊	延寶二年甲寅秋七月徳倉昌堅跋あり。	老子經 天/地	卷上一く五十一；卷下一く五十一	線白魚尾(巻上第一・五・六葉のみ単黒魚尾)	老子經卷上/下(十二く十四葉は「上巻」となる)	半葉八行十八字(口義注文字稍小低一格)	半葉十八行・十字(子柁欄外書脳寄り、四行・三十六字)小字、本文と異書体(瘦体)。	上巻巻頭の注解、半葉二十二行三十二字。	五針目 ^⑩	親子柁・四周単辺無界・縦二十五糎×横十七・五糎(子柁縦十八糎×横十四糎)。 訓点・返り点あり。	二冊	縦二十七糎・横十九糎 美濃本	老子虞齊 ^{ママ} 口義	増補首書老子經 乾/坤	縹色	延宝二年跋本(一六七四)	延宝本

この表一から、両本は、表紙・内題・寸法・冊数・版式・匡郭寸法・本文及び頭注の行格・版心名が同じであることが分かる。実は、江戸初期の頭注本『老子廬齋口義』は殆どこのような体裁を持っている。しかし、簽題・巻頭の行格・魚尾・丁数・奥書・刊記などが異なっており、さらに延宝跋本は明暦本より一葉多いことが分かる。なお、延宝跋本は外に単黒魚尾本もあるが、家蔵の延宝跋本は巻上第一・五・六葉のみが単黒魚尾である以外、他は全て線白魚尾である（後の宝永六年刊本と明治印本は、家蔵延宝跋本と同体裁である⁽¹²⁾）。

二、巻頭注解及び頭注の異同

両本の巻頭の注解には相違が見られ、延宝跋本は明暦本よりも多い。延宝跋本に付加されている文章は、以下の五条である。

- 老子上三皇時爲玄中法師下三皇時爲金闕帝君伏羲時爲鬱華子神農時爲九靈老子祝融時爲廣壽子黃帝時爲廣成子顓頊時爲赤精子帝嚳時爲祿圖子堯時爲務成子舜時爲尹壽子夏禹時爲眞行子殷湯時爲錫則子文王時爲文邑先生一云守藏史或云在越爲范蠡在齊爲鴟夷子在吳爲陶朱公右雜見太平廣記
- 朱得之通義云唐書老子裔出臯陶其後爲李唐唐高祖初受脩禪過亳祀太上廟是也老子所著書相傳名道德經又謂其騎青牛出關不知所終及考莊子書載老子死其友秦失吊之然則稱經者後學尊之之辭曰不知所終者方外士欲神其事而誣之也管子曰虛無無形之謂道化育萬物之謂德先輩之擬名義必在此其詳見史記列傳
- 陶弘景眞誥卷九云太極真人云讀道德經五千文萬遍則雲駕來迎萬遍畢未去者一日二讀之耳須雲駕至而去
- 林廬齋口義希逸翰林學士景定間造
- 按景定紹定淳祐皆是南宋理宗年號也

明暦本の巻頭で、老子の伝説及び『道德經』について、『文献通考』二百十一卷・『宋學士全集』二十七卷・『焦氏筆乘』第三・『事物紀原』第二・『武后記』を引いて解説しているのに対して、延宝跋本には上記の五条が加えられているのである。即ち、延宝跋本は伝説や説話などの資料を補足して、より多くの情報を読者に与えようとしたのである。『老子臚齋口義』の作者林希逸については、両本とも同じく『萬姓統譜』及び『莊子後序』を引いて紹介している。

又、両本の「老子臚齋口義發題」の注解を比較すると、次の表二の如くである。

表二 「両本の「老子臚齋口義發題」注解比較表」

明暦本		延宝跋本	
語彙	引用資料	語彙	引用資料
「老子」	『史記』列傳・「玄妙内篇」	「發題」	與序同趙魏孟子序日題辭 ⁽¹³⁾
「姓李」	葛玄云・『事文類聚』・『佛祖通載』第三・「左傳注」・「史記注」	「老子」	同上、増加あり
「漫」	「韻會」	「姓李」	同上
「日聘」	『史記』「許慎曰」「正義曰」「神仙傳」	「漫」	同上
「楚國」	『史記』「地理志」「索隱」「晉太康地記」	「日聘」	同上
「藏室」	「索隱」	「楚國」	同上
「周景」	或説云孔子年三十一歳……『闕理志」	「藏室」	同上
「礼記」	「鄭注」・石渠先生曰此老聃非作……	「周景」	同上
「語曰」	「論語述而注」「正義」「延平先生羅從彦仲素曰」「龜山集」或問	「礼記」	同上
「嚴事」	『史記』弟子傳	「語曰」	同上
「過與」	『家語』卷二	「嚴事」	同上
「離合」	『史記』老子傳・『漢書』郊祀志・『史記』封禪書	「過與」	同上
		「離合」	同上

『老子臚齋口義』の明暦三年刊本と延宝二年跋本との比較

〔周室〕	『史記』・『抱朴子』・『列仙傳』・『列異傳』
〔繫辭〕	『易』本義
〔河上〕	『列仙傳』
〔奇偶〕	按奇者一三五七九偶者……〔字彙〕
〔嚴遵〕	嚴遵字君平蜀成都人作老子指畝……
〔陰道〕	易蒙引云……
〔元宗〕	宋朝避玄改元見文公家礼注……
〔習尚〕	『性理大全』五十七
〔論〕	『説文』
〔勞攘〕	『性理大全』
〔西山〕	眞西山也眞德秀字景元……
〔陰謀〕	『史記』齊世家
〔道家〕	『漢書』藝文志・東坡曰
〔崇尚〕	『性理大全』五十七
〔誕〕	『韻會』
〔異端〕	『論語注』
〔可非〕	『莊子』秋水
〔往往〕	『文選』甘泉賦
〔穎濱〕	『三蘇文集』
〔近似〕	『楚辭』後語卷二
〔語脉〕	『碧巖録』第三
〔窒礙〕	『朱子語録』卷十七・『説文』・『廣韻』・『増韻』
〔與佛書〕	蘇子由自題老子解後云……
〔天下〕	『莊子』天下
〔無為〕	『論語』・『繫辭』
〔不爭〕	『論語』・『曲礼』・『尚書』

〔周室〕	同上、増加あり ¹⁴
〔繫辭〕	同上
〔河上〕	同上
〔奇偶〕	同上
〔嚴遵〕	同上
〔陰道〕	同上
〔元宗〕	同上、増加あり ¹⁵
〔習尚〕	同上
〔論〕	同上
〔勞攘〕	同上
〔西山〕	同上
〔陰謀〕	同上
〔道家〕	同上
〔崇尚〕	同上
〔誕〕	同上
〔異端〕	同上、増加あり ¹⁶
〔可非〕	同上
〔往往〕	同上
〔穎濱〕	同上
〔近似〕	同上
〔語脉〕	同上
〔窒礙〕	同上
〔與佛書〕	同上
〔天下〕	同上
〔無為〕	同上
〔不爭〕	同上

「太過」	「易」	同上
「伊川曰」	「朱子語類」	同上
「胡文定」	「孔子通記」	同上
「三寶」	天下皆謂三寶…	同上、増加あり ⁽¹⁾
「皮膚」	「性理大全」	同上
「妙處」	「朱子語類」	同上
「貶議」	「小學」嘉言・「韻會」	同上
「從來」	「碧巖錄」卷三	同上
「未了」	「杜詩」	同上
「欸案」	「碧巖錄」卷一	同上
「眞所謂」	「莊子」齊物論・「韓文」・「文選」	同上

明暦本は「老子膚齋口義發題」に関して四十九語を取り上げて注解しており、延宝跋本はそれに「發題」を加えている。両本の「離合」「陰道」「三寶」について、後に述べているように、些かな異同があるが、ここでは「老子」「周室」「元宗」「異端」「三寶」の五つでは引用資料に増加が見られる。

更に、本文を検討してみると、巻上「道可道章第一」から「道常無為章第三十七」まで、そして巻下の「上徳不徳章第三十八」から「信言不美章第八十一」まで、それぞれの頭注は、延宝跋本の方が語彙数にして七項多いこと以外、⁽¹⁸⁾両本に取り上げられた三百八十三個の語彙（巻上百九十八個・巻下百八十五個）は、全く同様である。但し、それぞれに施している注解の引用資料について、延宝跋本には下記の二十五箇所⁽¹⁹⁾の異同が見られる。

表三 「延宝跋本の本文頭注の異同」

章 題	語 彙	異 同
「道可道章第一」	「道可道」	李贄「老子解」増加 李卓吾「老子評」増加
「視之不見章第十四」	「無名」	「書伊訓云先生肇修人紀」増加
「古之善為士章第十五」	「綱紀」	「老子解」増加
「致虚極章第十六」	「古之」	「老子解」増加
「太上章第十七」	「致虚」	「老子解」増加
「絶學無憂章第二十」	「太上」	「老子解」増加
「善行無轍迹章第二十七」	「絶學」	「古人曰此章多用衆人我獨字屈原漁父辭本於此」増加
「將欲取天下章第二十九」	「善行」	「老子解」増加
「以道佐人主章第三十」	「將欲」	「老子解」増加
「大道汎兮章第三十四」	「以道」	「老子解」増加
「反者道之動章第四十」	「大道」	「老子解」増加
「上士聞道章第四十一」	「反者」	「老子解」増加
「道生一章第四十二」	「上士」	「老子解」増加
「聖人無常心章第四十九」	「道生」	「老子解」増加
「出生入死章第五十」	「聖人」	「老子解」増加
「知者不言章第五十六」	「出生」	「眞誥」六 増加
「以正治國章第五十七」	「綱領」	「孟子蒙引云」増加
「治人事天章第五十九」	「知者」	「息齊曰」増加
「道者萬物之奥章第六十二」	「以正」	「老子解」増加
	「治人」	「老子解」増加
	「詩不云」	「後漢書」章帝紀曰増加

「江海為百谷王章第六十六」
「善為士章第六十八」

「小國寡民章第八十」

「呂注」増加
「江海」
「士師」
「忿兵」
「恃力」

「呂注」増加
明曆三年刊本に『孟子』梁惠王下を引用しているのに対して、ここでは『論語』微子を引用している。
明曆三年刊本に『後漢書』袁紹傳を引用しているのに対して、ここでは「漢魏相傳」を引用している。
明曆三年刊本に『小学』立教を引用しているのに対して、ここでは『史記』伍子胥傳を引用している。

以上二十五箇所の引用資料の中、「善為士章第六十八」にある「士師」と「忿兵」、及び「小國寡民章第八十」にある「恃力」が、明曆本と全く異なる以外は、他の二十二箇所は、引用資料を増加させたものである。つまり、上述べた三百八十三語彙についての注解で異なるのは三箇所、増加しているのは二十二箇所で、残りの三百五十八語彙に施した注解は全く同じなのである。

三、徳倉昌堅の解釈

前述したように明曆本頭注に、「解者堅按」や「堅按」がしばしば見られる。これらを延宝跋本と照合すれば、「堅按」が所々「昌堅按」になっている以外、下記の十七箇所の注解の全てが一致している。⁽¹⁹⁾

老子虞齋口義發題

「離合」昌堅按史漢皆謂合七十年而伯王出焉云然又封禪書曰合十七年而伯王出焉云七十與十七之年數天地懸隔未知何是矣⁽²⁰⁾

「陰道」昌堅按以極陰數合極陽數則得八九七十二章矣

『老子虞齋口義』の明曆三年刊本と延宝二年跋本との比較

「三寶」昌堅按老子非有三寶之名大公望六韜所說之三寶大農大工大商也且又孟子有土地人民政事之三寶

「皮膚」堅又按正宗贊達磨傳道副得皮惣持得肉道肉得髓云云

天地不仁章第五

「鼓舞」昌堅按鼓舞出入之四字积作文之妙處

「或者以」堅按河上公之事乎河上公曰多事害神多言害身不如守德於中育氣稀言也

上善若水章第八

「解者」堅按為水之上善七者蘇子由呂吉甫河上公之說也

視之不見章第十四

註「解者猶」堅按李約無垢子漪園皆分別希夷微之三字

大道廢章第十八

「大道」堅按論語曰歲寒然後知松柏之後凋老子曰國家昏亂有忠臣因是觀之孔老之書其意同其理同何有異旨哉

孔德之容章第二十一

「孔德」堅按衆甫字義有兩說子由希逸林子德清皆言甫美也萬物之美也吉甫息齊弱侯無垢子皆言甫始也群有之始也

天地萬物之始也又按諸子品節注閱歷也甫與父同男子之美称衆父者古今歷伐之賢聖也自古及今道之

屬於衆父久矣我何以知衆甫之得道哉以斯道之屬於衆甫耳

曲則全章第二十二

「曲則」堅按此章之意屈信往來之義也尺蠖之屈為信其身也龍蛇之蟄為存其身也長直之木有折傷弱垂之柳無損折之意也

有物混成章第二十五

「鼓舞」堅按鼓舞之文謂作文之妙處

善行無轍迹章第二十七

「滑疑」堅按襲掩藏也記曰揜而充裘曰襲○襲明者言藏其明而不露也

「善人不善人」堅按論語日子曰三人行必有我師焉擇其善者而從之其不善者而改之與此句意相似孔老子一致可以觀

焉

知人者智章第三十三

「謂之克」堅按顏淵之克已復禮之意也

以正治國章第五十七

「機械」堅按機主發也要也械桎梏也一曰器之總名莊子天地曰有機械者必有機事有機事者必有機心機心存於胸中則

純白不備注機械器也

道者萬物之奧章第六十二

「今藥家」堅按柳文卷十七宋清傳宋清有與善藥於人不取直之事文長詞多故畧而不載宜見彼集矣

従つて、明曆本の「堅」は即ち徳倉昌堅である。徳倉昌堅は『老子虞齋口義』が流行している中で、明曆本及び延宝跋本の刊行に携わつて来たのみならず、自身の解釈を付加しているのである。明曆本の奥書に「羅山道春考焉」とあるから、林羅山が「考」したもしくは「校」したことがあり、加筆したことがあるとも考えられる。だが、両本のどこまでが徳倉昌堅の注解とは判断し難いが、少なくとも延宝跋本の増加した部分、及び昌堅自身の解釈を示した部分は彼が施したものに違いない。それらは殆ど語彙についての解釈であるが、所々昌堅自身の老

子についての考えを表明した箇所もある。そこで、徳倉昌堅自身が老子や『老子膚齋口義』に対してどのような見解を持っていたのかについて検討してみたい。まず、彼の思考をはつきり表す「大道廢章第十八」と「善行無轍迹章第二十七」の注解を検討してみよう。

堅按論語曰歲寒然後知松栢之後凋老子曰國家昏亂有忠臣因是觀之孔老之書其意同其理同何有異旨哉

「大道廢章第十八」

(堅按ずるに、論語に曰く、歲寒くして、然る後に松栢の凋むに後るるを知ると。老子に曰く國家昏亂して忠臣有り。是に因りて之を觀れば、孔老の書其の意同じく其の理同じ。何ぞ異旨有らんや)

堅按論語曰子曰三人行必有我師焉擇其善者而從之其不善者而改之與此句意相似孔老一致可以觀焉

「善行無轍迹章第二十七」

(堅按ずるに、論語に曰く、子曰く、三人行なへば、必ず我が師有り。其の善き者を擇びて之に従ふ。其の善からざる者は之を改むと。此の句と意相ひ似たり。孔老の一致以て觀る可し)

「大道廢章第十八」の注解で、徳倉昌堅は『論語』子罕にある「歲寒」の一文と、老子の「國家昏亂」一文とが同じ意味だと考えているのである。

後者「善行無轍迹章第二十七」では、徳倉昌堅は『論語』述而の文を引いて、老子の言う「善人者、不善人之師、不善人者善人の資(善人は不善人の先生であり、不善人は善人の反省の助けである)」と似ていると言ひ、孔子と老子の考えは一致していると説いている。

以上から分かるように、徳倉昌堅によれば、老子は孔子と同じ思考を持ち、同じ道理を説くものなのである。このような思考は「老子膚齋口義發題」「三寶」の注解にも見られる。

天下皆謂章三寶一曰慈二曰儉三曰不敢為天下先云昌堅按、老子非有三寶之名、大公望六韜所說之三寶大農大工大商也且又孟子有土地人民政事之三寶

(天下皆謂章に、三寶は一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先と為らずと云ふ。昌堅按ずるに、老子にのみ三寶の名有るに非ず。大公望の六韜に説く所の三寶は大農・大工・大商(商)なり。且つ又孟子に土地・人民・政事の三寶有り)

「天下皆謂章第六十七」に「我有三寶、持而保之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢為天下先(我に三寶有り、持して之を保つ。一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先と為らずと)」とあるように、「私には三つの宝があつて、それを大切に持っている。一は慈愛ということ、二は無駄をしないこと、三は天下の人々の先頭に立とうとしないこと」と老子は言う。徳倉昌堅は「三宝」と言葉は『老子』にのみならず、太公望の『六韜』と『孟子』にも見られると言ひ、太公望の言う「三宝」とは「大農」「大工」「大商」、孟子の言う「三宝」とは「土地」「人民」「政事」と言う。

正保四年刊本の「發題」は「三寶。慈儉不敢為天下先 土地人民政事」と注解する。老子の言う三宝——慈・儉・不敢為天下先——を、孟子の言う土地・人民・政事と同格にしているのである。つまり、老子の三宝は孟子の土地・人民・政事に通ずるというニュアンスが感じられる。言つて見れば、彼は従来江戸初期の儒者と同じように、儒家の理念をもつて老子を理解し、孔老一致と主張している。

結語

延宝跋本の成立経緯については、徳倉昌堅の跋文に明確に述べられている。別に論じたように、「徳倉昌堅が嘗て諸注を集め、文字を考証して上梓した書物は二十年に近い歳月を経て、板木の文字が磨滅したり、脱落したりしたので、板元に補正を求められた彼は、既刊の書物の不足を補い、余分な字句を除き、新たに版を起こして上梓したのである」⁽²¹⁾。延宝二年以前、それまでの頭注本『老子膚齋口義』には、前述した正保四年刊（林甚右衛門新刊）本、正保五年刊（書林豊興堂重刊行）本、そして明暦（三年刊）本がある。明暦本は本文が正保四年刊本に基づき、正保四年刊本の頭注を所々踏まえながら大幅に増補した別刻本である。延宝跋本は明暦本に基づいて頭注を増補しているが、頭注を除いて前者は後者の覆刻である。両本とも儒者の立場で注解を施す徳倉昌堅の見解が十七箇所も見られ、その内容も全て一致しているのである。以上、本論文では、両本をいささか精密に調査することにより、明暦本が延宝跋本の底本であることをあらためて確認し、あわせて徳倉昌堅の補正の実態と注解者としての姿勢、およびその思想的特質を考察した。⁽²²⁾

注

(1) 王 廸「江戸時代における老莊研究―老莊関係書物を中心に―」『人間文化研究年報』第二十一号 お茶の水女子大学人間文化研究科 一九九八年三月 五〇頁。

(2) 山城喜憲 神宮文庫蔵『老子経抄』解題篇 『斯道文庫論集』第三十三輯 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫 平成十一年二月 二三七頁。

老子膚齋口義 二卷 宋林希逸撰 林羅山点並首書 正保四年（一六四七）刊（京 林甚右衛門）

(3) 前掲①。「江戸時代における老莊研究——老莊関係書物を中心に——」五〇頁。

(4) 前掲①。「江戸時代における老莊研究——老莊関係書物を中心に——」五二頁〜五三頁。

(5) 「日本における『老子』受容」——主として書誌的観点より——『東洋学研究』第三十八号 東洋大学東洋学研究所 平成十三年三月 四九頁。

(6) 『早稲田大学所蔵漢籍分類目録』にはすべて「徳倉昌賢」している。

(7) 前掲②『斯道文庫論集』第三十三輯 二二七頁。

(題簽「道春点首書老子經」) 二卷 林羅山点「徳倉昌賢」首書 明暦三(一六五七)刊(京 上村次郎右衛門) 延寶二(一六七四)跋刊(京 上村次郎右衛門) 翻明暦三年 増補首書。

(8) 前掲⑤。「日本における『老子』受容」——主として書誌的観点より——四八頁。

(9) 例えば、明暦本の「天下皆知章第二」に口義注の「但老子説得太刻苦」一文について、延宝跋本には「但老子説得太刻苦」と「太」を「大」にし、又、明暦本「道冲章第四」の「冲」を、延宝跋本は「冲」に作る。明暦本の頭注にある「和其光而明乃光之昧也」の「昧」を延宝跋本は「體」に作る。

(10) 早稲田大学中央図書館所蔵本は上巻が改装で四針目、下巻が原本のままで、五針目であるから、原形は五針目である。

(11) 一橋大学附属図書館所蔵二巻一冊本がそうであるが、早稲田大学中央図書館、東京大学総合図書館及び静嘉堂文庫所蔵本は家蔵本と同じ。

(12) 『老子口義』上下二冊 宝永六年 書林寶文堂大野木市兵衛刊行 一橋大学附属図書館所蔵本及び家蔵本。

『訂正鼈頭老子經』大東文化大学白木蔵書及び早稲田大学中央図書館蔵本 京都寺町通四條北田中治兵衛 明治印本。

(13) 抱朴子老子名耳字伯陽一名雅字伯宗一名志字伯光

(14) 『増補首書老子經』乾坤二冊 家蔵本 乾 三裏く四葉表。

括地志云散關在岐州陳倉縣東南五十二里函谷關在陝州桃林縣西南十二里

(15) 前掲⑭『増補首書老子經』乾 家蔵本 四葉裏。

「元宗」について、下記のように増加する。

『老子虞齋口義』の明暦三年刊本と延宝二年跋本との比較

通義云分章莫究其始至唐玄宗改定章句是旧有分章而不定者是以有五十五韓非六十四孔穎達六十八吳草七十二莊君平八十一刘向又有不分章如王輔氏司馬君實者今以意遊志凡其意本托始詞復更端者固當自為一章至於語断而意未盡與下文脉絡相貫者亦古文體也今一章之内時有此式如天地不仁章之類用是聊為區別

(16) 前掲⑭『増補首書老子經』乾 五葉表。

「異端」について、下記のように増加する。

通義云老子尚道德而黜仁義黜仁義黜其跡也世儒黜老子未究其蘊也竊嘗為之說曰道者無方之仁仁者有象之道仁而不道者有矣未有道而不仁者也故通義之指歸大約在此而世儒之說不能悉與之弁亦望虚心者因是而有悟也

(17) 前掲⑭『増補首書老子經』乾 五葉裏。

「三寶」について、下記のように増加する。

唐白居易曰夫欲使人情儉樸時俗清和莫先於體黃老之道也其道在乎尚寬簡務儉素不炫聰察不役知能而已蓋善用之者雖一邑一群一國至于天下皆可以致清静之理焉昔必賤得之故不下堂而單父之人化汲黯得之故不出閤而東海之政成曹參得之故獄市勿擾而齊國大和漢文得之故刑罰不用而天下大理其故無他清静之所致耳

(18) 前掲⑭『増補首書老子經』乾に、

十一葉裏、「不尚賢章第三」口義注の語彙「飽以食」

二十八葉表、「太上章第十七」口義注の語彙「猶夷猶也」

五十葉表、「將欲喻之章第三十六」口義注の語彙「眩」

が増加されている。

前掲⑭『増補首書老子經』坤に、

十四葉の裏、「聖人無常心第四九」口義注の語彙「慄」

二十八葉表、「治大國章第六十」口義注の語彙「頓」

四十葉表、「用兵有言章第六十九」口義注の語彙「自眩」

五十葉表、「小國寡民章第八十」口義注の語彙「民井」

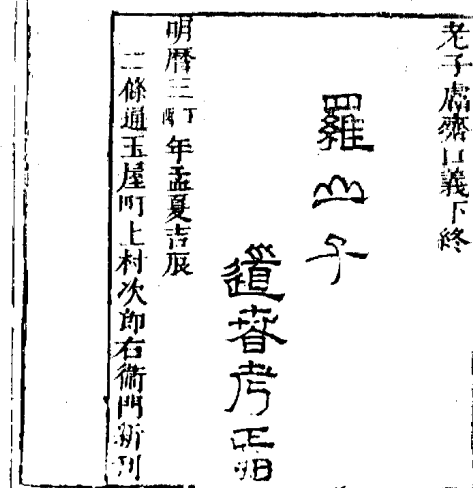
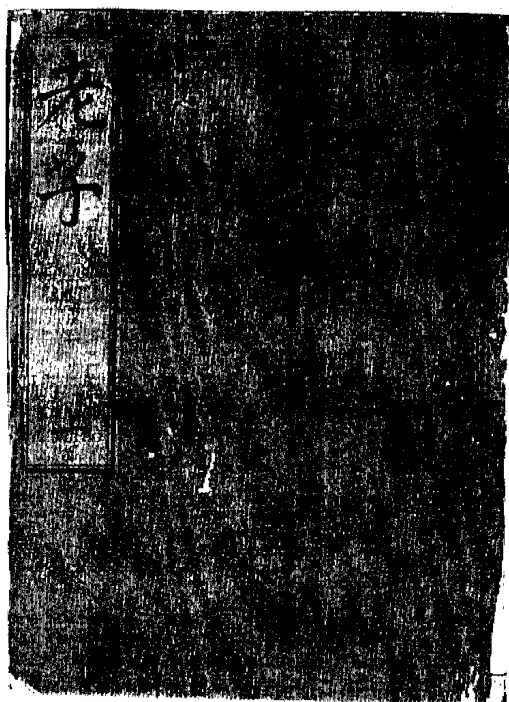
が増加されている。

(19) 両本全書に互つて、「按」一語は所々見られるが、元注者それとも昌堅が施したものは不明であるから、ここでは取上げない。

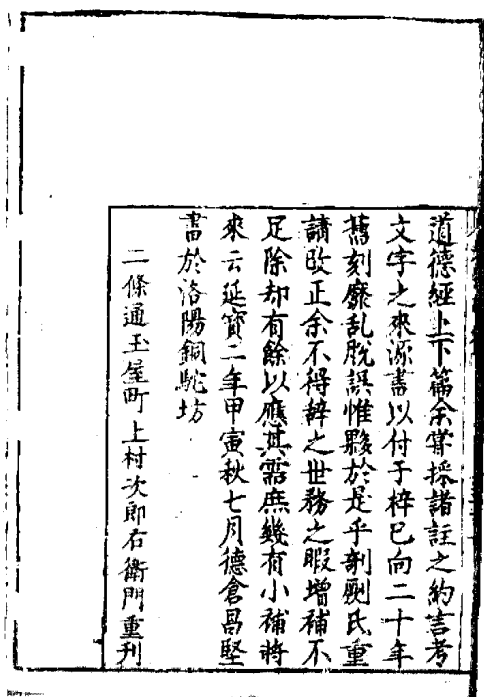
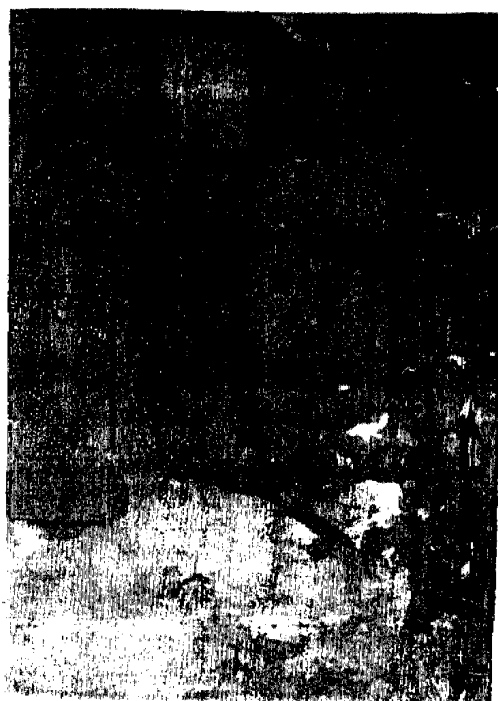
(20) 明暦刊本は「昌」を欠く、「昌堅」を「堅」に作る(以下同じ)。

(21) 前掲⑤「日本における『老子』受容」―主として書誌学的観点より―四八頁。

(22) なお、江戸時代の『老子臚齋口義』の出版物を可能な限り目を通したが、現在のところ「尚堅」という人物は見出せない。「尚堅」は「昌堅」のことで、『江戸時代書林出版書籍目録集成』に著録された延宝三年刊「老子經増補首書尚堅(作)」が即ち、この延宝跋本のこと、もしくは延宝跋本の刊行年が延宝三年であるとも考えられる。



家蔵明曆三年刊『老子』（『老子麴齋口義』）及び奥書・刊記



家蔵延寶二年刊『增補首書老子經』（『老子麴齋口義』）及び奥書・刊記